

甲骨文字の世界（1）はじめに

佐藤久美：文学部の学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：情報科学部の学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を
趣味としている。

安井教授：漢文の先生。いろいろな文字に関心がある。

第1回目

教科書の記述

殷と商

殷の年代

第2回目

甲骨文字の発見

甲骨文字の時代

占うこと、文字を刻すこと

第3回目

甲骨文字と甲骨文

甲骨文と漢語

第1回目

．．．．．安井教授の研究室。お茶を飲みながら．．．．．

《教科書の記述》

安井教授：佐藤さん、そこに高校の世界史の教科書（『三省堂 世界史[B]改訂版』）があります。古代中国の「殷」と「甲骨文字」についてまとめてくれませんか。

佐藤久美：はい。

．．．．．

教科書によりますと、こういったことです。

一、殷は紀元前 17～16 世紀ごろ建国され、紀元前 11 世紀ごろ周によって滅ぼされた。

- 二、現在の河南省安陽市に殷後期の遺跡がある。1899 年、この付近から文字が刻まれた獣骨や亀甲が発見された。これが「甲骨文字」である。
- 三、1928 年以來、大規模な学術調査が行われ、殷の事情が明らかになった。
- 四、殷王は甲骨を用いて占いをを行い、その結果にもとづいて政治を行った。その記録に使われたものが甲骨文字で、漢字の基礎となった。
- 五、占いを行うには、亀の甲や獣の骨の裏側を火で熱し、表面に生じたひびの具合によって吉凶を判断し、その結果を表面に刻み込んだ。

《殷と商》

山村健一：中国で出版された本の年表をみますと、古代の王朝として「夏」「商」「周」・・・と並んでいます。どうして「殷」という王朝名が出てこないのでしょうか？

安井教授：「殷」の人たちは自分たちのことを「商」と呼んでいました。ですから中国では殷とはいわず商といいます。

こんなことが書かれた甲骨文があります。

己巳に王がト（ボク）して貞（ト）う；
 今歳、商は年を受けるか？
 王、占って曰く；吉なり

これは「己巳という日に王がト占をして聞いた。今年、商は年（作物の実り）を受けるだろうか？と。それから、王は甲骨のひび割れの具合などを見て予言をした。吉である。」という意味です。この後に、東西南北の土地の稔りを占う文が続きます。これによって「商」が諸方の中心にあることがわかります。

山村健一：そうしますと、殷というのは何でしょうか？

安井教授：殷王朝創始者の湯（ト）王は亳（ハク。現在の河南省偃師県（エンシケン）にあったとされる）に都を置きました。19 代目の王である盤庚（バンコウ）から最後の 30 代紂王（チウウ）までのあいだは、殷に都が置かれました。殷は現在の安陽市小屯一帯の地域にあたります。商王朝が栄えた後半期の都が殷というわけです。日本ではこの王朝を殷と呼ぶのが一般的ですので、ここでも殷ということにしましょう。

《殷の年代》

佐藤久美：殷は「紀元前 17～16 世紀ごろ建国され、紀元前 11 世紀ごろ周によって滅ぼ

された」とありますが、このようなことはどうしてわかるのでしょうか？

安井教授：中国古代には、「夏」(カ)、「殷」(イ)、「周」(シュウ)という王朝があったということになっています。

佐藤さん、それぞれの関係についてなにかご存じですか？

佐藤久美：はい。「夏」王朝は今のところ伝説の王朝のようです。その最後の王とされる桀(ケツ)を、殷の湯(トウ)が倒して殷王朝を建てました。それから、殷王朝の最後の王は紂(チュウ)なのですが、その紂王を周の武王が倒して周王朝を建てたということではないでしょうか。

安井教授：そのとおりですね。

それで佐藤さんの疑問は、殷の湯王が夏の桀王を倒した年代と、殷の紂王が周の武王に倒された年代はどうしてわかるのかということになります。

『史記』の巻十四には「十二諸侯年表第二」という年表があります。そこにでている最も古い紀年は、周の共和元年です。紀元前 841 年にあたります。これより、前漢の武帝の太初四年(紀元前 101 年)までたどることができませんが、紀元前 841 年以前の紀年はわかりません。ですから殷の紂王が周の武王に倒された正確な年代はわかりません。わからないのですが幾つか説はあります。最も古く見積もった説は紀元前 1111 年、新しいものは 1023 年です。

それで、『竹書紀年』(チクショキネン)という本に「湯が夏を滅ぼし、二十九代の王を経て、四百九十六年かかった」(湯滅夏以至于受、二十九王、用歳四百九十六年)とあります。ですから、殷の湯王が夏の桀王を倒した年代は、紀元前 1111 年説によると、これに 496 年をたして紀元前 1607 年となます。紀元前 1023 年説によると、これに 496 年をたして紀元前 1519 年となります。このあたりのことは『中国の歴史 01 神話から歴史へ 神話時代 夏王朝』(宮本一夫著。講談社、2005 年)にでていますので目を通しておいください。

夏

桀王

..... 1607 年、 1519 年

湯王

殷(商)

496 年間(『竹書紀年』による)

紂王

..... 1111 年説、1023 年説

武王

周

..... 共和元年 841 年(『史記』による)

第2回目

《甲骨文字の発見》

佐藤久美：「1899年に安陽市の付近から文字が刻まれた獣骨や亀甲が発見された」とありますが、誰がどのように発見したのでしょうか？

安井教授：甲骨文字を始めて世の中に紹介した本は『鉄雲蔵龜』です。これは劉鶚（リュウガク。字あざなは鉄雲テツウ）という人が1903年の11月に出版したものです。劉鶚自身が書いた序文によりますと、甲骨は巳亥の年（1899年）に河南省の湯陰県から出土したといえます（「亀板、巳亥歳、出土在河南湯陰県」）。その一部とおもわれるものを王懿栄（ウイイ）という人に持ち込んだ骨董商人がいました。庚子の年（1900年）のことです。王氏はこれを見て価値を認め購入したといえます。ところが同年、歴史上有名な「義和団事件」が起こり、王氏は清朝の高官として殉死してしまいました。その後壬寅の年（1902年）に劉鶚が王氏所蔵の甲骨片を買い取り、劉鶚自ら収集したものと合わせると五千片ほどになったようです。そのなかより千片ほど（正確には1058片）良いものを選び出して拓本にとり1903年に出版しました。

ですから、この序によりますと、1899年という年は、タダの甲骨片が掘り出された年ではなくて、古代文字の資料として価値が確認されることになる甲骨文字片が掘り出された年、ということになります。甲骨文字片そのものは1899年以前から出土していたことでしょう。それは人々の目に触れていたはずですが、「心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞かえず」といったところでしょうか。刻されている文字を的確に評価することができて、それで始めて大きな価値と影響が生じるわけです。

誰がどのように発見したかということも序に書いてあります。それによると、農民が土地の盛り上がっている部分を見つけ掘ってみると骨片が出てきたということです。

佐藤久美：教科書によりますと、甲骨文字片の出土地は河南省の安陽市とありますが、劉鶚の序文では河南省の湯陰県となっています。安陽市と湯陰県はどのような関係にあるのでしょうか？

安井教授：湯陰県は、殷の最後の王である紂王の離宮鹿台（ルクタイ）があったところです。戦いに破れた紂王が鹿台に火を放って身を投じ、殷王朝の幕が閉じた場所として有名です。湯陰県は安陽市の南にあり二つは異なる場所です。

当時、甲骨文字片は高く売れました。それを生業にしている人たちは出土地を教えたくなかったのでしょうか。湯陰県は鹿台があった場所としてよく

知られていたため出土地として都合がよかったわけです。その話しをそのまま信用して書いたものでしょう。

《甲骨文字の時代》

佐藤久美：「殷後期の遺跡から文字が刻まれた獣骨や亀甲が発見された」とあります。どうして遺跡が殷代のものだとわかったのでしょうか？ しかも後期であるとしてわかったのでしょうか？

安井教授：まずは遺跡自体のことは傍らにおきます。王懿榮と劉鶚は甲骨に刻まれた文字の価値を認め収集し、それが『鉄雲蔵龜』として結実したことはお話ししました。この『鉄雲蔵龜』は世界で始めて甲骨文字を紹介した画期的な書物です。その著者である劉鶚は序のなかで甲骨文字片は中国古代の殷のものであると述べています。

甲骨文のなかに、「祖乙、祖辛、母庚」などの人名がでてきます。劉鶚によると、乙、辛、庚などの十干を人名に用いていることが殷人の証拠であるというのです（「祖乙、祖辛、母庚、以天干為名。実為殷人之確拠也。」）。確かに手元にある『史記』をみましても、十干を王の名前に用いているのは殷だけです。これはなかなか鋭い見方です。

佐藤久美：しかし劉鶚は湯陰県から出土したと思っていたわけですね？

安井教授：そうです。甲骨の出土地が安陽市の小屯であることがわかったのは今しばらく経ってからです。

佐藤久美：小屯から出土した甲骨文字片が殷の遺物であるということはわかりました。それで、どうして殷の後期のものとわかったのでしょうか？

安井教授：殷王朝の王の系図は司馬遷が書いた『史記』にでています。それで、小屯付近から出土した甲骨文字資料は内容から、系図中のどの王の時代のものかわかります。正確にいうと、わかるものもあるということです。はっきりわかるものは第 22 代の武丁以降のものでした。

それで『竹書紀年』という本をみますと、「盤庚が殷に移ってから紂が滅ぶまでの 273 年間は都を移すことはなかった」（自盤庚徙殷、至紂之滅、二百七十三年。更不徙都。）とあります。そのとおりだとすると殷後期の第 19 代の盤庚から第 30 代の紂王（すなわち帝辛）まで同じ地域に都があったこととなります。小屯付近から出土した甲骨文字資料は第 22 代の武丁以降のものでしたから、ここ小屯一帯は、盤庚が移ってから紂が滅ぶまでの 273 年間の「商」の都すなわち殷であるということとなります。

佐藤久美：殷墟から出てくる甲骨文字片は第 22 代の武丁以降のものだけということですが、第 19,20,21 代の王の時代の甲骨文字は無いのでしょうか？

安井教授：第 19 代は盤庚、第 20 代は小辛、第 21 代は武丁のお父さんの小乙です。どう

いうわけか、はっきりとこの時代のものとわかる甲骨文字資料は出土していないようです。武丁以前のまとまった文字資料がどうして見つからないのか不思議です。

山村健一：武丁以前のまとまった文字資料が見つからないのは不思議なことだとお話ですが、どうして不思議なのでしょう？

安井教授：甲骨文字について次のような見方が一般的です。

この文字は、原始的な絵画文字ではなく、かなり抽象化された文字であり、研究者のあいだでは、これよりまえに、すでになんらかの形の文字が使用されていたことが認められている。ただ、それがまだ発見されていないだけである。（『古代中国』（貝塚茂樹、伊藤道治著。講談社学術文庫、2000年14頁）

甲骨に記された文字は相当程度に発達した文字である。そうであるからには、武丁時代の甲骨文字に連続する前段階の文字があるにちがいない。長い年月を経て次第に甲骨に記された文字に発展したものに違いないという考えです。そういう観点からすると、武丁時代の甲骨文字につながる文字資料が発見されず、この文字が武丁の時代に唐突に現れたかのように見えるわけですから不思議だということになるわけです。

山村健一：最近、西夏文字の概説書を読んだのですが、西夏文字は11世紀のある時期に一挙にできたようです。もっとも回りには漢字やチベット文字など参考になる文字がありました。完成度の高い文字とその運用の実例があれば、それを参考にして、一時に独創的な文字組織を作ることも可能であることを示す例です。武丁時代の甲骨文字も、「何らかの文字」に触発され短期間に作られたということもあり得るのではないのでしょうか？

安井教授：武丁時代の甲骨文字は、長い時間をかけて次第に整えられできあがった結果であるというのが、大方の研究者の見方であり、無理のない見方でもあります。山村君のように「何らかの文字に触発され」というばあい、「何らかの文字」とは何か、どのような接触があったのかということの説明しなければなりません。おそらくそれは難しいことでしょう。

《占うこと、文字を刻すこと》

佐藤久美：先に「己巳に王がト（ホク）して貞（ト）う；今歳、商は年を受けるか？王、占って曰く；吉なり」という甲骨文字の資料をみました。占いによって政治を行うのはわかるのですが、どうしてわざわざ堅い亀の甲羅や牛の骨に文字を「刻み込んだ」のでしょうか？

安井教授：「どうして」という原因を推察するのはなかなか難しいですね。人の行動はそれほど合理的ではありませんから、「ひよんな事」から甲骨に文字を刻み

始めたということがあってもいいわけです。もっとも、どうして始まったかという初期の動機と、それが定着した後どの様に利用されたかということは分けて考えたほうがいいかもしれません。

佐藤久美：大変な回数の占いをしたわけですから、その備忘録ということではないのですか？

安井教授：当時すでに筆や墨のようなものがありました。それで書かれた甲骨文字片も出土しています。備忘録もしくは単なる記録ということでしたら筆や墨によればいいわけで、苦勞して刻み込む必要はないようにおもいます。

佐藤久美：「今年、実りをうけるか？」と聞いて「吉」であると神の意志を伝えたわけです。そのとおりになったかどうか知りたくなりますね。もしも、不作で大飢饉にでもなったならば王は神意を間違って伝えたことになり面目は丸つぶれで権威は失墜しますが、その反対に予想通り吉であったならば、王の権威は高まります。

安井教授：この資料には予想した結果つまり王が伝えた神意の結果がどうなったかということについては何も刻まれていませんが、結果を刻んだものもあります。ですから、「王は神意を正しく伝えたのだ」ということを明示するために記したとの説もあります。このことについて白川静 1972 (『甲骨文の世界 古代殷王朝の構造』東洋文庫 204、平凡社)には次のようにあります。

「すなわち卜辞は、貞卜によってその行為が完結するのではなく、貞卜の結果が現実となることを要求する意味を持つ、したがってこれをその卜兆の旁に刻し、塗色して聖化し、その実証されたことを証示する。そのゆえに刻辞が必要なのであった。そしてそれを証示することによって、神聖な王の権威を確かめるものとなる。」(31-32頁)

佐藤久美：占いの行為とその結果が王の権威を高め神聖化するのに役立ったということですね。ですが、占いをした当事者達は内容を記憶しているでしょうから、なにも甲骨に刻まなくても神意を正しく伝えてさえいれば信用は失墜しないとおもいますが。

山村健一：習慣として定着し長年に渡って行われるからには、「文字を刻み込むということ自体」に何らかの価値を認めたのだと考えるしかありません。ただ、神意を正しく伝えていることを証明するために刻した、というような功利的な見方だけで説明が可能かどうか疑問です。

思うに、王が神意を間違いなく伝えているということを疑いようのない大前提として、甲骨に現れた神意そのものへの恐れと敬いの心情の発露から甲骨に文字を刻み込んだのではないのでしょうか。文字自体も極めて神聖なもの

であったはずで、すなわち、神意が現実のものとなったからといって、それで占いの行為の正当性を実証するというのではなく、神への賛辞として現実のものとなった結果も刻み込んだのではないのでしょうか。

要するに、甲骨に文字を刻み込むという行為は、神聖な占いの内容すなわち神意を永遠に止めるため神聖な文字で甲骨に刻み込んだということで、神意に対する恐れと敬いの発露と考えたいです。

佐藤久美：二つの見方があるわけですね。一つは、卜辞を刻すという行為は単なる記録ではなく神意を正しく伝えたことを証し王の権威を高めるためにあるという見方。いま一つは、神意にたいする恐れと敬いの表現であるという見方です。

当初は神意にたいする恐れと敬いの発露として文字が刻まれ、それが習慣化し、その後は王の権威付けに利用されたということかもしれませんね。

第3回目

《甲骨文字と甲骨文》

佐藤久美：教科書によると「占いの記録に使われたものが甲骨文字である」ということですが、甲骨には占い以外のことは記してないのでしょうか？

安井教授：ほとんどは卜占の記録ですので「卜辞」などと呼ばれます。もっとも、十干十二支の表や東西南北の風神の一覧表などもあります。これは卜占の行為に直接関わるものではありません。ですから、このような表も含めて甲骨に記された文を「甲骨文」と呼びましょう。

佐藤久美：甲骨文に使用される文字が「甲骨文字」というわけですね？

安井教授：そうですね。「甲骨文字」はどのような構造になっているか。「甲骨文」の構造はどうか。それぞれに研究しなければなりません。

佐藤久美：甲骨文の構造とはどういうことでしょうか？

安井教授：文法も構造の一つですが、それだけではありません。

先に挙げた甲骨文を見てください。下線部は「セリフ」の部分で、それ以外は「地」の部分です。

己巳に王がト(ボク)して貞(ト)う；今歳、商は年を受けるか？
王、占って曰く；吉なり

セリフと地が構造をなしているともいえます。現代の我々の目から見ると当たり前のことのように見えますが、これは良く練られた文章です。おそらく、卜占

の儀式の中で調子を付けて念じられるか、あるいは歌われるかしたもので、長い時間をかけ一定の様式ができあがったのでしょう。それを武丁の時代に文字を用いて甲骨に刻み込んだということではないのでしょうか。通常の口頭の言葉とはかけ離れていたかもしれませんね。

《甲骨文と漢語》

佐藤久美：ところで教科書には「甲骨文字は漢字の基礎」とあります。甲骨文字と漢字とは別物のようにも読みとれますが、甲骨文字は漢字ではないのですか？

安井教授：ここでいう「漢字」というのは、現代の我々が使用している漢字を指しているのでしょうか。ですから、我々が日常生活の中で使っている漢字の元が甲骨文字だというくらいの意味です。

いうまでもなく、漢字とは漢語（中国語）を記した中国の伝統的な文字のことで、篆書、隸書、楷書、草書など様々な漢字があります。そのような漢字と甲骨文字との間に字形上の深刻な断絶はないようです。甲骨文字で記された言葉も漢語でしょうから、甲骨文字は「初期の漢字」とはいいられると思います。

佐藤久美：甲骨文字で記された言葉が漢語であるとしてどうしてわかるのでしょうか？

文字と言葉は別物です。漢字の原型で書かれているからといって、その言葉が漢語（中国語）であるとは言い切れません。甲骨文字で書かれた言葉と漢語（中国語）とはどのような関係にあるのでしょうか？ 殷の甲骨文の言葉はほんとうに漢語なのでしょう？

安井教授：山村君はどうおもいますか？

山村健一：佐藤さんが思い描いている漢語（中国語）とは何かということが問題です。漢語はタイ語やチベット語と近い関係にある言葉とされています。

それで、殷王たちの言葉の一端は甲骨文からわかるのですが、三千数百年前の殷王たちの言葉が、現在の漢語、タイ語、チベット語などのどれと近いかということを考えているのでしょうか？

佐藤久美：そうではなくて、殷の後に西周、戦国時代、秦、漢ときて、現在の中国の言葉に続くのですが、その間、言葉の上で「断絶」はないのかということですね。異なる言葉を話す民族が互いに入れ替わって言葉も入れ替わったということになれば「断絶がある」ということでしょうし、「ある言葉」が核になって徐々に変化したということならば「断絶がない」といっても良いのではないのでしょうか。

山村健一：断絶がないとしたら、殷の言葉がタイ語的であろうと、チベット語的であろうと、それは漢語の祖先と言って良いということですね？

山村健一：そういうことになります。

安井教授：殷と西周の間に言葉の上で断絶があるかどうか、西周から漢までのあいだに断絶があるかどうか、おもしろいテーマですね。ただ、話される言葉と書かれる言葉は別物なので注意が必要です。とくに甲骨文字は意味を表わす象形文字が主体ですから、文字を並べる一定の約束さえ互いに確認してあれば、異なる言葉を話す者どうしても理解は可能となります。甲骨文という書かれた言葉にはどのような約束事があるのか、その約束事は西周、戦国時代、秦、漢の書かれた言葉の約束事とどのような関係にあるかということです。もっとも一度成立した文章の約束事は、文化を継承するように繋がっていき、実際に話す言葉そのものと離れて成立する場合もあるので注意が必要です。

*****これで終わります*****

以上は吉池孝一が担当しました